

中高生とともに差別と闘う

いるのにいない存在

吉成タダシ



ですが、実は本当にそんな体験をした人など、誰一人としていませんでした。突き詰めて尋ねていくと、「実は自分ではなく知り合いが」と。その知り合いの人はどこのどんな方なのかと尋ねると、「実は知り合いの知り合いで」と。じゃあその知り合いの知り合いはどこのどんな方なのかと尋ねると、しどろもどろになり、挙げ句の果てには誤魔化して終わります。つまり、「あなたの知らないことを私は知っているんだ」という優越感をひけらかすために、中途半端に聞きかじっただけの、偏見に満ちた嘘のうわさ話を並べたてるのです。アツミがどんな思いで聞き、どんな思いで言葉を返していたのか：そう思うと、胸も頭も、体中の血という血が、激しく沸き立つてくるのです。

いるのにいない存在

「地区の人間は、差別するな、差別するなって言うでしょ?? だけど私から言わせれば、あなたたちがいつまでも差別されるようなこととしてきてるだけじゃないのって思うよ。普通におとなしく生きてたら、もうとつくに部落差別なんていう言葉なくなってるのよ。自分で撒いた種なのよ」って言われた。

私、もうどこまで言われたら絶対わかってもらえないって思ってた、何も反論できなくなっちゃったよ。今まで私が一番慮下だったから、二人ともすごく可愛がってくれたのに、「私が地区出身で、今も住んでいます」って言っ

たら、どうなるんだらって思ってた。」

そこに「いる」のに、「いない」ように扱われる、それが部落差別。もうアツミには、反論する力は残っていませんでした。アツミが地区出身だと分かっていたら、この二人はいったい何を話したでしょうか。

いじめ問題でも、同じようなことが言えます。いじめの対象になるということは、そこに「いる」のに、「いない」存在として扱われるということです。排除され、無視されるということですから。こんなに悔しいことはありません。

人は、自分の周りに「いない」と思えば、何でも好き勝手なことを言えてしまう残酷さをもっています。でも、もし「いる」と思えば、言葉を選ぶかもしれません。行動も選ぶかもしれません。いや、もしかすると自分自身の言葉や行動を選ぶばかりか、生き方そのものを変えられるかもしれません。人間にはそういう可能性もあるのです。他人と過去は変えられませんが、自分と未来は変えられるのです。

昔ではなく今の問題

「今日の出来事を日記みたいにして自分のブログに書いた。そしたら、『名無し』の人からコメントがきて、『私の学校でも奨学金受ける人は、地区出身でしたよ。親とかが内緒で申請してるかもしれないよ』ってコメント書かれた。

部落差別ってホントに残ってるん

ですね。だって、28歳と36歳ですよ。まだまだ十分若いのに、この差別の仕方……。昔々の話と違ってた……。

先生がクラスで部落差別の話してたのを思い出したよ。『今はそんな差別ないんじゃないの?? だって私、差別されたことないよ』って思いながら聞いてた部分もある。でも先生があんなに必死に訴えてたのが、今は分かる。だから三年A組には、差別するような子は一人もいなかった。そして今も変わらず、あのときの教えのまま、みんなちゃんと育った子ばかり。

私のブログ、『部落差別』ってタイトルにしただけで、閲覧数もすごい、多分荒れると思う。」

部落差別意識は高齢層が高く、若年層では改善されてきていると言われることがあります。本当にそうでしょうか。確かに同和教育・人権教育の成果で前進してきた部分はあります。ですが、以前高まっていたような熱が冷めてはいないでしょうか。それが今、逆にこの二人のような若者を生み出してはいないでしょうか。

心がけを説くことは大切です。でも、「昔のこと」と思ってアクションしなくなると、部落差別だけでなく、他の様々な人権課題に対しても、いつの間にか意識が後退してたりするものです。そのためにも心がけと同時に、いじめや差別を許さないシステムを学校や社会に、人権の皆として築いていければと思います。

学校現場では今

学校現場では今、同和教育の時代に先頭を切って実践されてきた先生方が、毎年大量に定年退職をむかえられていきます。そして今、現場に増えつつある若い先生方に引き継ぎ、受け継ぐべき中堅層の先生方は少なく、谷間世代となっています。以前大切にしてきた、「今日も机にあの子がいない」や、「靴べらしの同和教育」を大切な合言葉として取り組んできた実践は、果たして今、どうなっているでしょうか。

かつて部落差別によって学校に行くことができなかった、地区の子どもたちやその家族の思い。そんな思いを共に担ぎ、空いた机を真剣に見つめ、教師としてすべきことは何か、何ができるのか、と自問自答していた学校現場。今、各教室に一人以上いると言われる、不登校に陥った子どもたちの机には、どんな眼差しが向けられているでしょうか。

問題が起きたからといって、親子共々学校に呼び出しをするのではなく、目ごろから学校と家庭との結びつきを大切にしようと思えば減らし、徹底して家庭訪問を行ってきた先達の努力の結晶は、今の学校現場に生かされているでしょうか。

部落差別解消へと向けてきた眼差しを、私たちは今あらためて、すべての子どもたちに注がなければならぬのではないのでしょうか。

(次回「事実は小説より奇なり」)